

第7回 【フグの皮】

日銀下関支店長 岩下直行

下関の冬といえばフグである。大きな皿に盛りつけられた薄造りの刺身を囲むと、誰もが幸せそうな顔つきになる。

この刺身の皿に、細切りにされたフグの皮の湯引きが添えられることも多い。フグの皮は三種類に分かれる。黒っぽい表皮層はサメカワ（鮫皮）、白く透明な中間層はトウトウミ、肌色の最下層はミカワ（身皮）と呼ばれる。特にトウトウミはゼラチン状でコリコリとした食感が面白く、和え物で食べてもおいしい。

この部位がトウトウミと呼ばれるのは、昔の国名の駄じゃれなのだそうだ。この部位はミカワ（身皮）のすぐ隣にある。ミカワは三河の国（愛知県東部）に通じるので、そのすぐ隣にある遠江の国（静岡県西部）にちなんでこの名前が付けられたらしい。遠江は仮名では「とおとうみ」と書くのが正しいのだが、元の意味が失われて音だけが伝わったので、トウトウミとなったのだろう。

この遠江という旧国名は、近江（おうみ）と対をなすものだ。近江の国（滋賀県）には琵琶湖があり、遠江の国には浜名湖がある。琵琶湖は京都から近い湖（淡海、おうみ）、浜名湖は京都から遠い湖（遠つ淡海）ということで、各々の国名がついたのだという。

このように、旧国名は、京都からの距離に着目して、近と遠、上と下、前中後などを付けたものが多く、古代日本における地理感覚が分かって面白い。例えば千葉県は、北から下総、上総、安房の三国に分かれている。京都から行くとすると、現代ならば、東京を経由してまず下総から入ることになる。しかし、古代では、その国境に利根川が流れていた（江戸時代に千葉県の北側を横切るように河川改修された）。この大河とその氾濫原を越えて行くのが大変なので、三浦半島から船で房総半島に渡り、上総を先に通るルートが使われたらしい。現代の感覚では京都から遠い国のほうに「上」が付くのはこのためだ。

山口県は山陰・山陽の五県のひとつだが、この地方は古くから「中国」と呼ばれてきた。その語源を調べてみると、これもまた京都からの距離がポイントらしい。かつて、近畿の諸国は近いので近国（きんごく）、九州等は遠いので遠国（おんごく）と呼ばれていたが、山陰・山陽の国々はその中間なので、「京都に近くも遠くもない国」という意味で中国と呼ばれ、それがこの地方の固有名詞となったものらしい。

近年、中華人民共和国が経済発展を遂げ、日本国内でも極めて頻繁に話題に上るようになったので、「中国」という言葉を使うときに注意が必要になってきた。「中国地方」と書かないと、外国のことと誤解されかねない状況だ。山陰・山陽の中国は、「中心」、「中央」の意味ではなく、「中ほど」、「中庸」の意味で付けられた、奥ゆかしい名前である。今後も大切に使い続けていきたいものだ。